



岡山赤十字病院

日本赤十字社

日赤

# ふれあい 新聞



## 緩和ケア病棟での 窓越し面会

- \* 褥瘡(じょくそう)対策チームとしての取り組み
- \* 真鍋島へき地診療支援について

No.77

夏号

2021.8

理念 ● 信頼され親しまれる病院に

手をつなぐぬくもり — 地域とともに —  
「愛と心」がかけよう医療を皆さまに提供します

### 岡山赤十字病院基本方針

1. 患者の皆さまの権利と意思を尊重し、十分な説明と同意に基づいた患者中心の医療を実践します。
2. 地域の中核病院として、高度で安全な急性期医療の提供に努めます。
3. 地域医療機関等との連携を密にし、患者の皆さまに適した医療を提供します。
4. 救命救急センター、地域がん診療連携拠点病院としての機能の充実に努めます。
5. 災害に対応した医療救護活動を積極的に行います。
6. 優秀な人材を確保し、次代の医療を担う人材の育成に努めます。
7. 良質な医療活動を遂行するため、医療施策に沿って健全な病院運営に努めます。

## 緩和ケア病棟での窓越し面会

緩和ケア病棟 看護師長 藤岡香代子

新型コロナウイルス感染症の影響で病院での面会が制限され、1年以上が経過しました。病気やけがの治療や検査で入院される患者さまにとって、ご家族やご友人の面会がどれほど励みになり、心の支えになっているか、私たち看護師は患者さまの一番近くにおいて、いつも感じていました。しかし、どうしても感染のリスクから患者さまを守る必要があり、面会を制限せざるを得ない状況が続いているのが現状です。

緩和ケア病棟では全面的に面会が禁止されてから4日後に「窓越し面会」を始めました。もう会えないかもしれない、どうしてももう1度会いたい、今まで毎日会っていた家族に会えないなんて考えられないという方々に、何とかできないかという思いと、「せめて窓越しにでも会えないもんかねえ。」という患者さまの声から、独立型の平屋建てという特徴を活かし、スピーディに開始することが出来ました。

「窓越し」というと少し切ないイメージを持たれる方もいらっしゃるかもしれませんが、でも実際に窓越し面会



をして頂くと、「やっと顔が見れた、やっぱり顔を見んと安心できんよ。」「電話やテレビ電話ではわかりにくかった今の様子がよくわかった。」と喜んで下さる方が多くいらっしゃいました。掃出しの大きな窓ガラスは窓越しを感じさせないくらいで、「また来るね」と手を振る姿は、家族の温かい気持ちが伝わり、患者さまに安心と生きる希望を与えてくれます。緩和ケア病棟の窓越し面会では、笑顔と涙と思いがあふれています。

外からでは病室の位置が分からないこと、プライバシーに配慮する必要がある事などから、看護師がご案内するため予約制とさせていただいています。それでも直接会って、互いに寄り添い、手を握り、足をさするなど、して頂きたい事は沢山あります。1日も早く、もとの面会ができる日が来ることを心から願っています。



## 褥瘡対策チームとしての取り組み

皮膚・排泄ケア認定看護師 藤岡英子



みなさんは、褥瘡(じょくそう)を知っていますか？褥瘡は、一般的には床ずれとも言います。一度褥瘡が出来ると治るまでに時間を要する事もあり、予防・早期発見が重要です。そのため、チーム医療での取り組みが必要不可欠となります。当院では、形成外科、皮膚科医師、褥瘡専任看護師、皮膚・排泄ケア認定看護師、管理栄養士、薬剤師、リハビリスタッフにて褥瘡対策チームを編成しており、1回/週のチーム回診を実施しています。褥瘡回診では、実際の褥瘡処置

や指導に始まり、栄養面やポジショニングなどの検討を関連部署とともに行っています。また、NST(栄養サポートチーム)との情報共有を行い、褥瘡治癒には欠かせない栄養面のサポートを行えるように努めています。

当院の褥瘡推定発生率は、0.62%(2020年)であり、日本褥瘡学会調査(2018年)における一般病院1.20%、大学病院0.94%と比較しても対策は行えていると考えています。

しかし、近年、高齢化社会に伴い、自宅や施設で発生し重症な褥瘡をもって入院される患者さんも多く居られ、褥瘡が治らないまま自宅や施設退院される事もあります。そのような患者さんが困らないように、

在宅スタッフとも協働し在宅の環境調整やケア調整なども行っています。

これからも地域に根付いたチーム医療が行えるように、努めていきたいと考えています。



## 薬剤部の活動について

薬剤部 横田幸子

薬剤部は薬剤師31名中3名の薬剤師が褥瘡回診に携わっています。私たちはチームの一員として、薬剤部の薬品セットを準備し回診の際に持ち歩いています。薬品セットは急な指示変更や処置に対応することができ、患者さんの負担軽減を担っています。薬剤師は薬品のエキスパートとして、患者さんや褥瘡の状態だけ

ではなく、退院後の持続可能なケアを含めた薬剤選択を提供する義務があると考えています。

最近よく耳にするSDGsならぬSDTs（持続可能な褥瘡治療 Sustainable Decubitus Treatments: SDTs 院内造語）でがんばりたいと思います。

## 真鍋島へき地診療支援について

皮膚科 馬屋原孝恒



岡山県へき地診療支援機構と当院医療社会事業課からの依頼にて、2021年4月から、皮膚科診療が笠岡市立真鍋島診療所にて内科（小児科）、整形外科に加わるかたちで、月に1回の頻度で開設されることとなりました。私と離島診療の経験のある光井先生とで隔月で担当しています。

真鍋島は、笠岡港からフェリーで40分程の笠岡諸島の中の1つで、周囲が7km程の島であり、近くの白石島へも当院は診療支援（内科）しています。

看護師さんも月曜日は3名おられ、当院皮膚科外来

と遜色ない以上の手厚い体制に驚きました。液体窒素は現在の頻度だと用意するのは難しいですが、軟膏や錠剤なども比較的充実しており、診療において困ることはありません。“皮膚科（の診療）ができるようになったから、どんな先生か顔を見に来た”と言って患者さんが来てくださったり、まだ人数は多くないですが広く認知され、島内の方のQOL改善に繋がればと思います。

P.S. なにやら撮影の舞台が建築中！？ ～詳細は皮膚科まで～

